

中寺廢寺跡

平成18年度



2007年3月

まんのう町教育委員会



A) C地区石組遺構2 落石除去後状況（南より）



B) C地区石組遺構9 落石除去後状況（右下が北）

序 文

まんのう町教育委員会では町内に所在する古代山岳寺院「中寺廃寺跡」の発掘調査を行っておられます。このたび、さまざまな形で発掘調査にご協力、ご支援を頂いた皆様のおかげを持ちまして、第3次の調査報告書を発行する運びとなりました。

平成18年度は、昨年度発掘調査を行いましたB地区から、南へ少し離れたC地区的調査を行いました。その結果、他の地区と関わりの深いと考えられる石組遺構を確認し、複数の役割を持つ施設が谷を挟んで対峙する古代山岳寺院の特徴を良好に示す重要な遺跡であることが確認できました。本報告書が四国古代佛教史研究の資料として広く活用されますとともに、埋蔵文化財に対する理解と関心が一層深められる一助となれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査、報告書の作成に際して、各方面より多大なるご協力とご指導を頂きました。ここに深く感謝の意を表しますとともに、今後の発掘調査・遺跡整備に引き続きよろしくご支援賜りますようお願い申し上げます。

平成19年3月

まんのう町教育委員会

教育長 尾 鼻 勝 吉

例　　言

1. 本書は、まんのう町教育委員会が文化庁と香川県の文化財補助金を受けて平成18年度国庫補助事業として実施した、まんのう町内遺跡発掘調査の報告書である。
2. 今回の遺跡発掘調査は、香川県仲多度郡まんのう町造田3469-2他に所在する中寺庵寺跡を対象とした。
3. 発掘調査はまんのう町教育委員会が行い、同主事加納裕之が担当し、同臨時職員中村文枝、同測量補助員平井佑典がこれを補助した。
4. 遺構実測は加納・中村・平井が行った。遺構・遺物の写真撮影、遺物実測、報告書の執筆・編集は加納が行った。遺構・遺物の浄書、図面のレイアウトは中村が行った。
5. 本書の実測図の縮尺はすべてスケールで表示した。また図中の方位・座標は国土座標第IV系（世界測地系）による。標高はT.P.（東京湾平均海面）からのプラス値である。座標・標高の記載はすべてm単位である。
6. 出土遺物・写真・図面等の調査成果物はまんのう町教育委員会にて保管している。
7. 挿図の一部に国土地理院発行5千分の1国土基本図を複製した琴南町全図（承認番号四複第238号）及び、国土地理院発行2万5千分の1地形図「内田」を一部改変して使用した。
8. 遺構は下記の略号によって表示している。
SB　掘立柱建物跡　SD　溝状遺構
9. 調査の実施から本書の執筆に至るまでは、以下の方々や諸機関のご指導・ご協力を頂きました。記してお礼申し上げます。
網田龍生・伊賀正法・上原真人・片桐孝浩・木原溥幸・坂井秀弥・菅原良弘・鈴木信男・中島恒次郎・丹羽佑一・信里芳紀・藤好史郎・松本和彦・松本豊胤・森内秀造・山下平重・山元敏裕・香川県埋蔵文化財調査センター・まんのう町文化財保護協会（敬称略・五十音順）

目 次

表紙写真 中寺廃寺跡C地区石組遺構1・2（東より）

1. 遺跡の環境	(1) 遺跡の立地 (2) 歴史的環境	(1)
2. 調査の経過	(1) 調査の経緯 (2) 中寺廃寺跡調査・整備組織 (3) 調査の経過	(4)
3. 遺構	(1) 概要 (2) 石組遺構の分布 (3) 石組遺構2 ①概要 ②立地と現況 ③石組遺構の構造 ④下部の構造 (4) 石組遺構4 ①概要 ②立地と現況 ③石組遺構の構造 ④下部の構造 (5) 石組遺構9 ①概要 ②立地と現況 ③石組遺構の構造 ④下部の構造 (6) 未調査の石組遺構	(6)
4. 遺物	(1) 概要 (2) C地区出土遺物 (3) 中寺廃寺跡出土多口瓶類例調査	(27)
5. 文献・聞き取り調査	(1) 概要 (2) 中寺廃寺跡周辺の仏縁地名 (3) 聞き取り調査の成果	(30)
6. まとめ	(1) 中寺廃寺跡C地区で確認した石組遺構に関する検討 その1 (2) 中寺廃寺跡C地区で確認した石組遺構に関する検討 その2 (3) 石組遺構の時代・性格について (4) 香川県内の山岳寺院から見た中寺廃寺跡	(37)

挿 図 目 次

第1図 中寺廃寺跡位置図	第10図 石組遺構4 平・立面図
第2図 中寺廃寺跡平坦地分布図	第11図 石組遺構9 平・立面図
第3図 C地区平面図	第12図 石組遺構9 断面図
第4図 C地区断面図 その1	第13図 C地区出土遺物実測図
第5図 C地区断面図 その2	第14図 中寺廃寺跡出土多口瓶実測図
第6図 石組遺構2 現況平・立面図	第15図 中寺廃寺跡周辺の地名分布図
第7図 石組遺構2 平・立面図	第16図 古代・中世の石組遺構
第8図 石組遺構2 断面図	第17図 中寺廃寺跡周辺の炭焼き窯分布図
第9図 石組遺構2 基底面平面図	

表 目 次

第1表 まんのう町内古代寺院遺跡	第4表 中寺を起源とする寺院
第2表 中寺廃寺跡C地区石組遺構一覧表	第5表 中寺廃寺跡石組遺構と古代・中世の石組遺構
第3表 相生産須恵器双耳壺と中寺廃寺跡多口瓶の新・古要素	

写真図版目次

- 図版 1. A) C地区石組遺構2 落石除去後状況（南より）
B) C地区石組遺構9 落石除去後状況（右下が北）
- 図版 2. A) 中寺廃寺跡・満濃池遠景（南東より） B) C地区遠景（南より）
- 図版 3. A) C地区石組遺構2 調査着手前状況遠景（北東より）
B) 調査着手前状況（北より） D) 調査着手前状況（南より）
C) 調査着手前状況（東より） E) 調査着手前状況（西より）
- 図版 4. A) C地区石組遺構2 下草除去後状況（南より） B) 下草除去後状況（北より）
C) 下草除去後状況（東より） D) 下草除去後状況（南より）
E) 下草除去後状況（西より）
- 図版 5. A) C地区石組遺構2 落石除去後状況（南より） B) 落石除去後状況（北より）
C) 落石除去後状況（東より） D) 落石除去後状況（南より）
E) 落石除去後状況（西より）
- 図版 6. A) C地区石組遺構2 断ち割り状況（北東より） B) 落石断面（北東より）
C) 基底面検出状況（東より） D) 石組遺構中央部断面（東より）
E) 石組遺構下部中央部断面（西より）
- 図版 7. A) C地区石組遺構4 調査着手前状況（右下が北）
B) 調査着手前状況（北東より） C) 調査着手前状況（東より）
D) 調査着手前状況（南西より） E) 調査着手前状況（北より）
- 図版 8. A) C地区石組遺構4 落石除去後状況（右上が北） B) 落石除去後状況（北東より）
C) 落石除去後状況（南東より） D) 落石除去後状況（南西より）
E) 落石除去後状況（北西より）
- 図版 9. A) C地区石組遺構9 調査着手前状況（右が北） B) 調査着手前状況（北より）
C) 調査着手前状況（東より） D) 調査着手前状況（南より）
E) 調査着手前状況（西より）
- 図版 10. A) C地区石組遺構9 落石除去後状況（右下が北） B) 落石除去後状況（北より）
C) 落石除去後状況（東より） D) 落石除去後状況（南より）
E) 落石除去後状況（西より）
- 図版 11. A) C地区石組遺構9 中央部断面（北より）
B) C地区石組遺構9 断ち割り状況（北東より）
- 図版 12. 石組遺構1・3・5・6
- 図版 13. 石組遺構7・8・10・11
- 図版 14. 石組遺構12・13・14・15
- 図版 15. 石組遺構16・第1～5トレンチ土層断面
- 図版 16. A) C地区出土遺物（内面） B) C地区出土遺物（外面）

1. 遺跡の環境

(1) 遺跡の立地

まんのう町は、香川県仲多度郡の3町（満濃町、仲南町、琴南町）が、平成18年3月20日に合併して誕生した新町である。香川県南西部に位置し、面積は約194.17km²になる。町内には約500ヶ所のため池が点在しており、西の山間部には町名の由来となっている日本一の灌漑用ため池『満濃池』がある。町の南側には標高1,000mを超える竜王山、大川山を主峰とする讃岐山脈が連なり、そのふもとを県下で唯一の一級河川である土器川が流れている。

中寺庵寺跡は大川山（1,043m）から西へと続く讃岐山脈から北西へ分岐した一支脈の先端付近に所在する。遺跡の北・西侧を主尾根で囲まれ、東側には小支尾根が南西に突出し、大川山山頂が位置する南東側に開けた谷の懐に位置する。遺跡が位置する谷の懐は緩斜面であるが、懐の外は急斜面となる。付近の尾根上には旧の行政区画である満濃町・仲南町・琴南町が接し、そこからは満濃池を一望できる。また、中寺庵寺跡付近は徳島県と満濃地区江畑・仲南地区塩入・琴南地区作野をつなぐ尾根沿いの道が昭和時代まで利用されていた。

(2) 歴史的環境

琴南地区内の遺跡と香川県内に所在する古代山岳寺院関係の遺跡については以前に刊行した報告書に譲り、まんのう町内の古代寺院関係の遺跡について述べる。

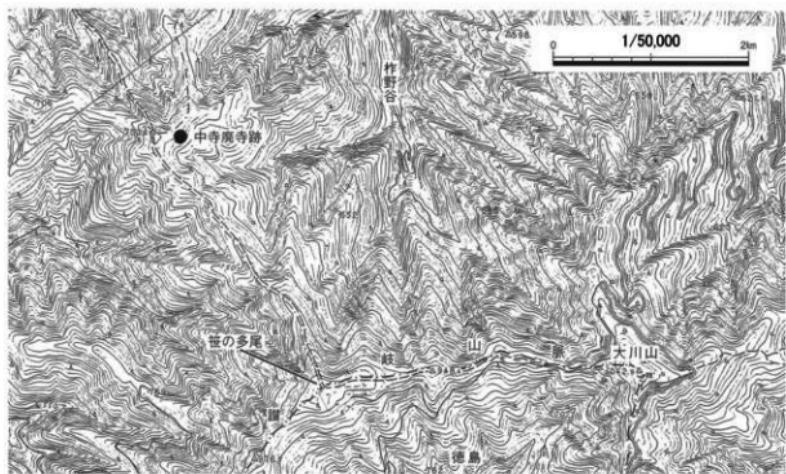
1は山岳寺院中寺庵寺跡である。2は金剛院集落の金華山に所在する金剛院経塚である。金剛院集落には仏縁地名が多く、山間に所在した寺院の痕跡と考えられる。3は弘安寺庵寺である。出土した十六葉單弁蓮華文軒丸瓦と同范の瓦が、大和片岡王寺（奈良）、五十村庵寺（大阪）、郡里庵寺（徳島）、神前庵寺（さぬき市）、極楽寺（さぬき市）、道音寺（三豊市）、開法寺（坂出）、仲村庵寺（普通寺）などで確認されている。また、古代条里制施行以前に設置されたと思われる礎石が数基確認されている。

番号	遺跡名	主要遺構	主要遺物	時期	所在地
1	中寺庵寺跡	掘立柱建物跡、塔跡、礎石建物跡	西播磨須恵器多口瓶、越州窯系青磁碗、須恵器、土師器、黒色土器椀、鉄釘	9C中葉～12C	仲多度郡 まんのう町 造田字中寺
2	金剛院経塚	経塚	陶製外筒、陶製経筒、銅製経筒、鉄製経筒、鏡	平安末	仲多度郡 まんのう町 炭所東
3	弘安寺庵寺	礎石	十六葉單弁蓮華文軒丸瓦、十二葉細單弁蓮華文軒丸瓦、八葉單弁蓮華文軒丸瓦、四重弧文軒平瓦	白鳳～奈良	仲多度郡 まんのう町 四條東村

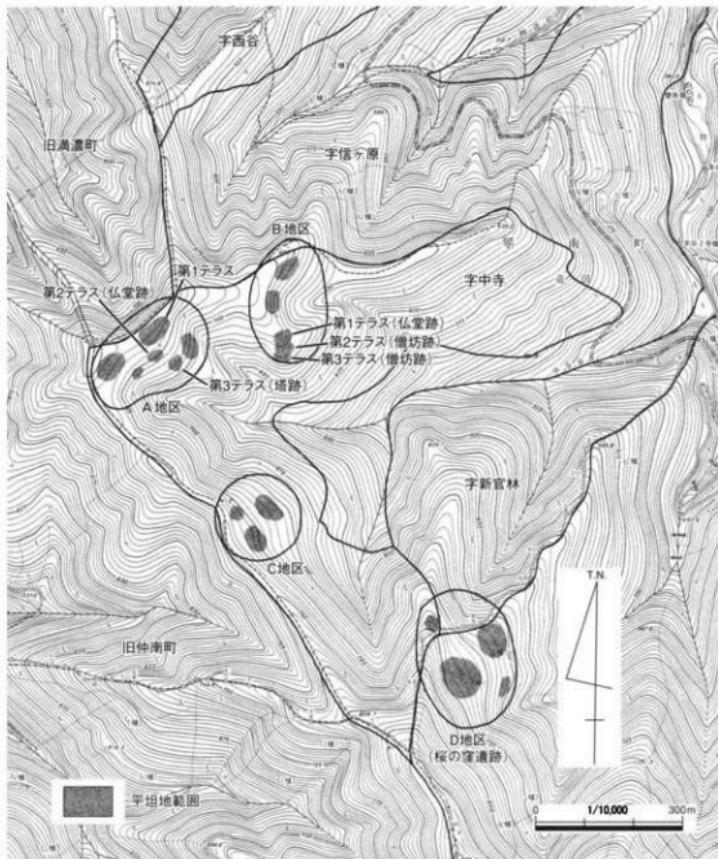
第1表 まんのう町内古代寺院遺跡



…標高100m以上



第1図 中寺廃寺跡位置図



第2図 中寺廃寺跡平坦地分布図



第3図 中寺廃寺跡平坦地分布状況

2. 調査の経過

(1) 調査の経緯（第1・2図参照）

調査地付近は、「中等」「信が原」「鐘が窪」「松地谷」という寺院関係の地名が所在すること、寛政11年(1799)に記された『讃岐廻遊記』中に「中寺」の表記があること、大川七坊といわれる寺院が山中に所在したと近隣集落において伝承されることより、寺院の存在を示唆されていた。しかし寺院の詳細が記された文献は未確認であり、中寺廃寺跡は長らく幻の寺院であった。

昭和56年に中寺廃寺跡付近の分布調査を実施し、現在のA地区付近において数箇所の平坦地を発見した。統いて昭和59年にはボーリング棒による調査を実施し、第2テラスで礎石を確認した。また第3テラスにおいては試掘調査により塔跡を確認した。塔心礎石の下部からは地鎮・鎮壇具と想定される10世紀前半の遺物が出土し、10世紀前半に塔が建立されたことを確認した。

平成15年度は字中寺全城の詳細分布調査を行い、約1,000mの範囲に遺跡が展開していることが判明した。また、遺跡は大きく4つの地区に分けることが可能であり、A～D地区とした。

平成16年度からは中寺廃寺跡調査・整備委員会を組織し、長期計画に基づき本格的な調査を実施した。平成16年度はA地区において塔跡・仏堂跡の発掘調査を実施した。その結果、A地区は10～11世紀における中寺廃寺跡の中心的な地区であることを確認した。また、文献調査の成果により19世紀前半には寺がすでに名称不明の状態であり、現在のD地区の位置に寺跡があると伝承されていたことを確認した。平成17年度はB地区において、仏堂跡・僧房跡の発掘調査を実施した。その結果、僧房跡から西播磨産須恵器多口瓶が出土し、僧房跡に伴う排水溝より越州窯系青磁碗が出土し、中寺に関わる人々が広い範囲の人々との交流を持っていたことを確認した。

(2) 中寺廃寺跡調査・整備組織

調査指導 中寺廃寺跡調査・整備委員会

委 員 上原真人（考古学 京都大学大学院教授） 鈴木信男（まんのう町文化財保護審議会 会長）
丹羽佑一（考古学 香川大学 教授） 松本豊胤（まんのう町文化財保護協会 副会長）
木原溥幸（文献史学 徳島文理大学教授） 菅原良弘（まんのう町文化財保護協会 副会長）
栗田隆義（まんのう町 町長） 尾鼻勝吉（まんのう町教育委員会 教育長）
オブザーバー 山下平重（香川県教育委員会文化行政課 主任）

調査担当 まんのう町教育委員会 中寺廃寺跡発掘調査室

總 括 雨露 弘（まんのう町教育委員会 課長補佐）
調査担当者 加納裕之（まんのう町教育委員会 主事）
調査補助員 中村文枝（まんのう町教育委員会 臨時職員）

（3）調査の経過

平成 18 年度は主に中寺廃寺跡 C 地区において測量・発掘調査を実施し、また B 地区の追加調査を行った。夏から秋にかけて現地作業を実施し、冬季は報告書作成期間とした。現地作業のうち B 地区の調査は 4 月下旬より開始し、6 月 1 日以降は国庫補助対象事業として進め、7 月下旬まで実施した。C 地区の調査としては 5 月中旬より調査準備を行い、6 月中旬から C 地区全体の地形測量を業者に委託した。7 月中旬より C 地区第 1 テラスの平板測量を実施し、8 月上旬より C 地区の発掘調査に着手した。調査終了後に調査区の埋め戻しを行い、12 月 5 日に終了した。その後第 4 回調査・整備委員会を 1 月 19 日に実施し、今年度調査成果の報告と、今後の調査・整備方針について協議した。整理作業は遺物・図面の基礎整理作業を発掘調査と平行して進め、発掘調査終了後に報告書掲載図面の整理・浄書を行い、2 月から 3 月にかけて報告書印刷を業者へ委託した。また、発掘調査の他に中寺廃寺跡関連では以下の視察・見学を受け、事業を開催した。

- 5 月 23 日 まんのう町文化財保護協会仲南支部総会「中寺廃寺跡の調査成果」講演 40 名
5 月 27 日 まんのう町文化財保護協会琴南支部総会「中寺廃寺跡の調査成果」講演 40 名
6 月 15 日 まんのう町長・教育長・町議会議長・副議長・教育民生常任委員会委員視察 15 名
7 月 29 日 香川歴史学会総会「中寺廃寺跡の発掘調査」講演 80 名
7 月 12 日 香川県教育委員会文化行政課藤好史郎課長補佐、山下平重主任現地視察
9 月 7 日 文化庁記念物課坂井秀弥主任文化財調査官、まんのう町長、教育長現地視察
9 月 11 日 調査・整備委員会上原真人委員、丹羽佑一委員、木原溥幸委員現地視察
9 月 29 日 香川大学学生見学 11 名
10 月 22 日 平成 18 年度現地説明会 40 名
10 月 31 日 琴南ふるさと資料館特別展「山を越え、海を渡った人やもの」開催 423 名
～11 月 12 日 (11 月 4・5 日まんのう町琴南地区文化祭に併せ展示解説会を実施)
11 月 18・19 日 まんのう町満濃地区文化祭にて中寺廃寺跡出土遺物展示 300 名
12 月 13 日 琴南ふるさと資料館にて琴南小学校 6 年生中寺展示説明 30 名
1 月 10～26 日 まんのう町役場ロビー展示「中寺廃寺跡の発掘調査」 役場来場者への周知



現地説明会



資料館特別展



調査整備委員会

3. 遺構

(1) 概要

平成 18 年度の発掘調査は C 地区を対象とした。C 地区は中寺廃寺跡が位置する南東へ開けた谷懐の南側で確認した地区であり、讃岐山脈から北西方向に伸びる尾根の北東側面にあたる。C 地区の北東に A 地区、北に B 地区が所在し、南西に D 地区が所在する。

C 地区調査において石組遺構を 16 基確認した（※1）。そのうち石組遺構 2・4・9 について発掘調査を行った。

また、C 地区調査に先立ち平成 17 年度に調査を行った B 地区第 2 テラスの追加調査を行った。その結果平成 17 年度に確認していた掘立柱建物跡 SB01・SB02 と溝状遺構 SD02 の続きを確認した。SB01 は桁行 3 間で幅が約 6.0m、梁行が 2 間で幅が約 3.6m の掘立柱建物跡であった。SB02 は桁行 3 間で幅が約 6.0m、梁行が 2 間で約 4.0m の掘立柱建物跡であった。SD02 は山側斜面と平坦地の境に位置する溝と、建物の桁行方向に併行する溝を確認した。前者は山側斜面より建物に流れ込む水を排水するための溝、後者は建物屋根からの雨落溝と考えられる。

※1 C 地区調査後行った踏査により、C 地区南西方向山側斜面において、新たに石組遺構を数基確認した。それらはいずれも C 地区石組遺構に比べ小規模であり、残存状況も悪い。しかし C 地区石組遺構に構造が近い遺構もあるため、その性格について今後検討したい。

(2) 石組遺構の分布（第 4 図・第 3 表）

今年度、中寺廃寺跡 C 地区の発掘調査で、人頭大と拳大の安山岩の角礫で構築された石組遺構を合計 16 基確認した。これらの石組遺構は、笹の多尾から北北西に延びる尾根から左右にいくつもの尾根が派生する中で、標高 740m 付近から北西方向と東方向に分岐して延びる二つの尾根に挟まれた最奥部（馬蹄形を呈した部分の最奥部）に位置する。石組遺構の位置するこの最奥部を、周辺の地形も含めて詳細に見ると、北側と南側に前述した尾根があり、その間のほぼ中央部に北西方向に低い尾根が延びる。最奥部はそれによって二分され、両側は緩やかな傾斜の谷状を呈した地形となる。石組遺構は尾根からの傾斜角度が約 24° とやや急な傾斜地と南側谷部の傾斜角度が約 10° の緩やかな傾斜地、部分的には平坦地と認められる部分で検出している。

石組遺構は①標高 687m 付近に所在する一群（石組遺構 5・6）、②標高 688m 付近に所在する一群（石組遺構 3・4・7）、③標高 689m 付近に所在する一群（石組遺構 1・2・8・9）、④標高 690m 以上に所在する一群（石組遺構 10・11・12・13）があり、⑤それらと少し離れた石組遺構（石組遺構 14・15・16）がある。①・②・③は平坦地から緩傾斜地にかけて立地し、④は急傾斜地に立地する。また、①②間、②③間には平坦地が帶状に続いている。

石組遺構に使用されている和泉砂岩亜角礫は基盤層中に多く含まれ、また付近の斜面に露出し

ており、付近の石を構築石材として利用できたものと思われる。

石組遺構調査に際して1～5トレンチを設定し、石組遺構周辺の基盤層の確認を試みた(第3・5・6図)。

1 トレンチは尾根鞍部から続く急傾斜地から低い尾根の頂部にかけて設定した。土層断面によると急傾斜地と尾根頂部の間に平坦面があり、平坦面から尾根頂部にかけて岩盤が高くなり、尾根頂部で平坦となる。尾根頂部は若干の削平を受けたものと思われる。

2 トレンチは低い尾根頂部に南北方向に設定した。土層断面によると、地山頂部が削平されていることが確認できる。地山上面は地山と若干土質の異なる⑤層によって被覆されている。

3 トレンチは低い尾根頂部に東西方向に設定した。土層断面によると、西半分は地山と若干土質の異なる④層が平坦面西側縁辺部に堆積している。東半分においても地山と若干土質の異なる③・④層が平坦面西側縁辺部から地山上面にかけて堆積している。

4 トレンチは石組遺構の集中する付近において帶状の平坦地に直行する形で設定した。土層断面によると、地山は一定の角度で傾斜しており、地山上面を②・③層がほぼ一定の厚さで堆積している。③層は石組遺構2の基盤層と考えられる層(第8図①・②層)とほぼ同質であるため、石組遺構の基盤層は緩斜面上部まで広範囲の広がりを持っていることが確認できる。

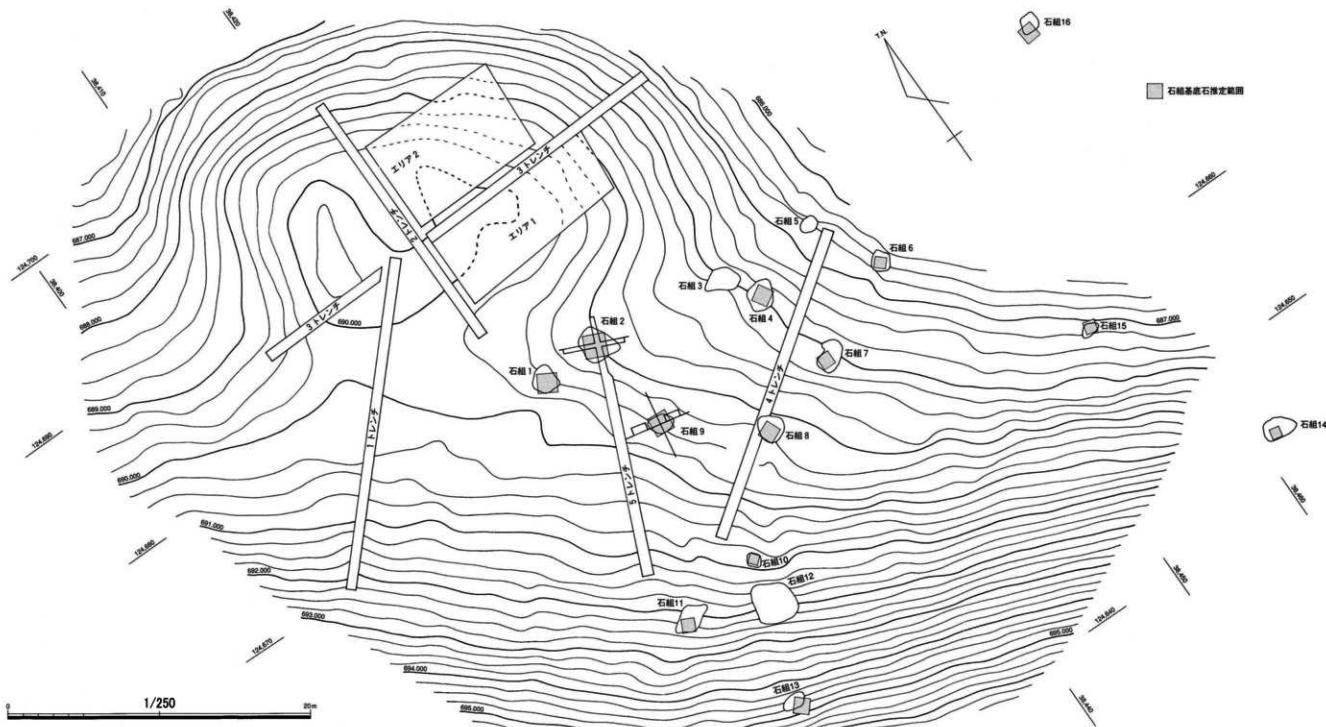
5 トレンチは石組遺構2から急傾斜地にかけて設定した。土層断面によると、4トレンチで確認した石組遺構の基盤層とほぼ同じ土質の②層が平坦部から山側斜面にかけて堆積しており、一定の角度で下っている。

以上のトレンチ調査からは、石組遺構の基盤層と考えられる黒色シルトは、1トレンチより南東の浅い谷においてのみ堆積していることが確認できた。また、2・3トレンチを設定した低い尾根には地山と土質の異なる層が堆積しているため、尾根頂部を削平した後に盛土によって造成されている可能性が確認できた。トレンチ調査の後、エリア1・2について平面的に遺構検出を試みたが遺構・遺物共に未確認であった。

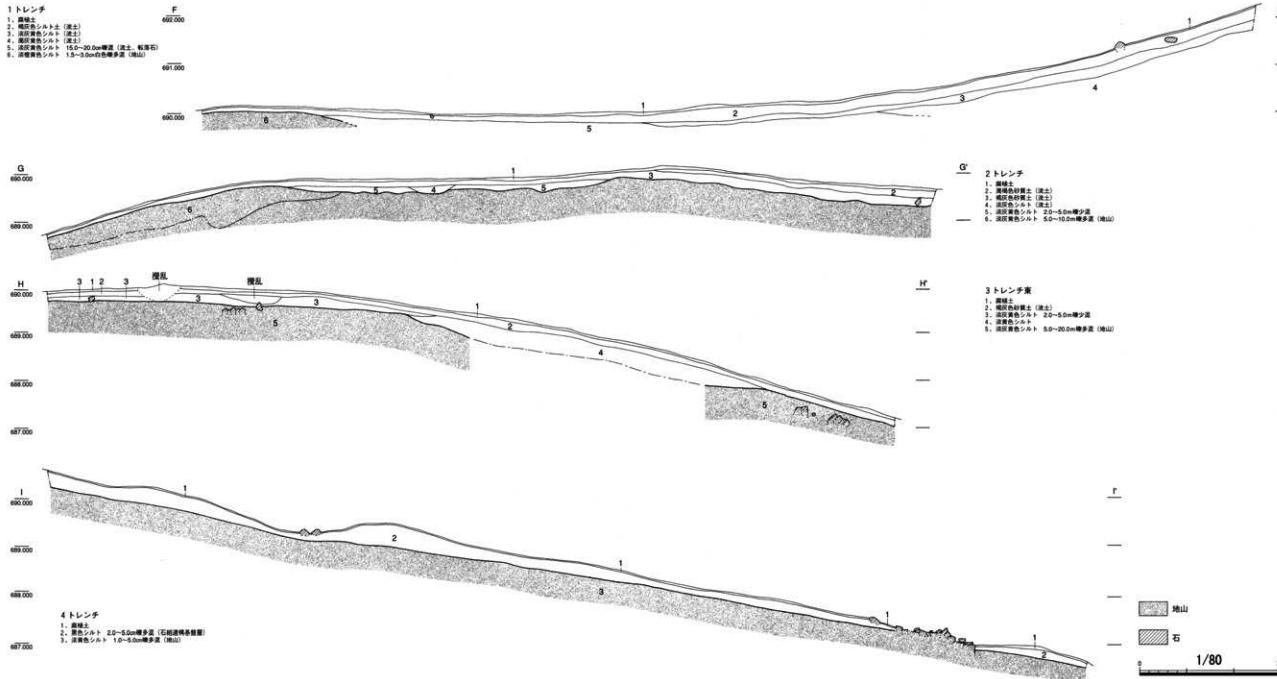
第2表 C地区石組遺構一覧表

石組遺構 番号	標高 (m)	標高 中標高 (m)	立 地	南北幅 (m)	東西幅 (m)	基底石 (m)	基底石 角度	出土遺物	保存状況
1	—	689.664	平坦地と緩斜面の境	1.7	1.6	(1.2)	(1.4) (西へ6°)	有 (遺物1点表記)	北東、北西南角は約45~35cmの石、 角度が約10°で、側面は約20cmの石、 中央部は約10~15cmの石。
2	689.696	—	688.622 緩斜面に接する 平坦地	2.7	2.1	1.4	1.65 西へ6°	有 (江戸遺物3点)	側面が約45~25cmの石、 中央部は約10~5cmの石。 中央部は基盤層面上に後石により覆をする。
3	—	688.580	平坦地に挟まれた 緩斜面の上端	1.4	2.4	—	—	無	—
4	688.259	—	686.549 平坦地に挟まれた 緩斜面の上端	1.8	2.2	1.0	1.2 西へ39°	有 (土師瓦1点)	側面は約45~25cmの石、 中央部は基盤層面上に後石により覆をする。
5	—	688.737	平坦地に挟まれた 緩斜面の上端	1	1.2	—	—	無	—
6	686.901	—	686.408 緩斜面	1.3	1.2	(0.9)	—	有 (西へ48°)	東側に約35cmの石、 他の側面は約20~45cmの石。 中央部の石は転落して表土が露出。
7	—	688.180	—	1.2	2.2	(1.0)	(1.0) (0°)	無	—
8	—	689.542	—	1.8	1.8	(1.1)	(1.0) (西へ19°)	無	基底石のみ 中央部は約30~25cmの石、 外側部は約10~20cmの石。
9	680.009	—	689.461 緩斜面	1.4	1.7	1.33	1.16 0°	有 (江戸遺物2点)	側面は約30~25cmの石(小口横、 中央部は一部約15~10cmの石、 外側部は一部約15~25cmの石、 中央部は約5cmの石)。
10	681.114	—	680.700 やや急斜面	0.9	0.9	—	—	無	基底石+1段 (外側部は約10~20cmの石、 中央部は約10~5cmの石)。
11	682.331	—	681.115 やや急斜面	1.4	1.9	(1.0)	(1.0) (東へ26°)	無	基底石のみ 中央部は約10~20cmの石。
12	682.440	—	681.273 急斜面	2.7	2.7	—	—	無	—
13	684.335	—	684.180 急斜面	1	1.4	(1.0)	(1.0) (西へ50°)	無	基底石+2段 (外側部は約20~35cmの石、 中央部は約15~10cmの石)。
14	689.006	—	689.020 急斜面	1.4	2.2	—	(0.9) (東へ8°)	無	基底石のみ 中央部は約30~25cmの石、 西側部は約40~15cmの石。
15	687.372	—	687.041 急斜面との接続付近の 緩斜面	0.8	0.8	—	—	無	基底石のみ 北側部は約30~25cmの石、他は約15~10cmの石。
16	681.720	—	681.070 急斜面	1.5	1.2	(0.9)	(0.9) (西へ6°)	無	基底石+2~3段 (外側部は約30~35cmの石、 中央部は約20~15cmの石)。

※()は推定値

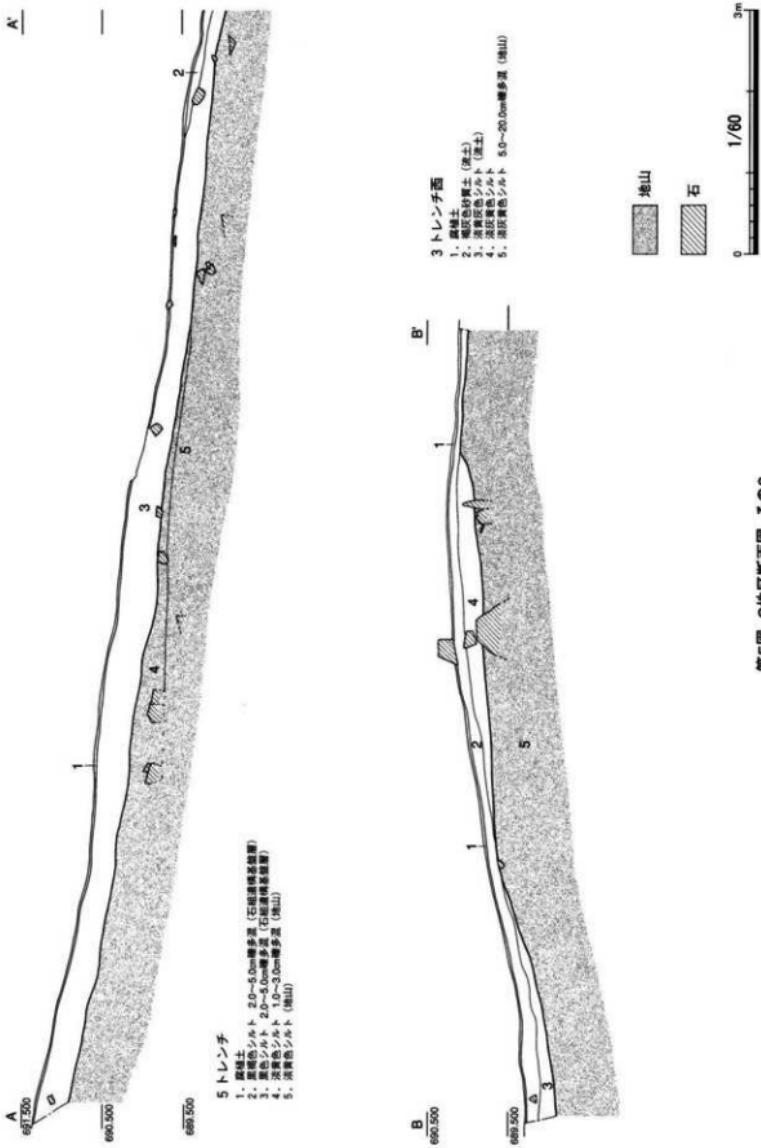


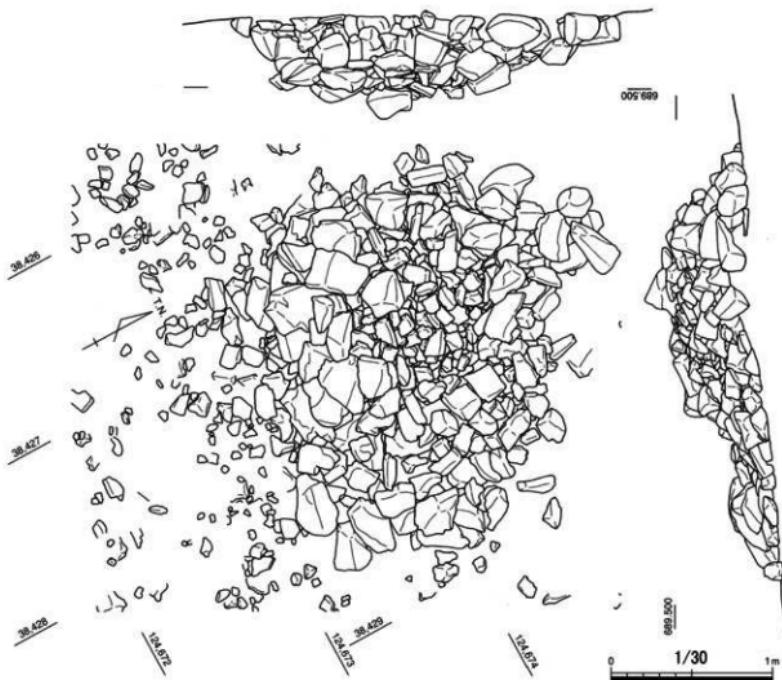
第3図 C地区平面図



第4図 C地区断面図 その1

第5図 C地区断面図 その2





第6図 石組遺構2 現況平・立面図

(3) 石組遺構2

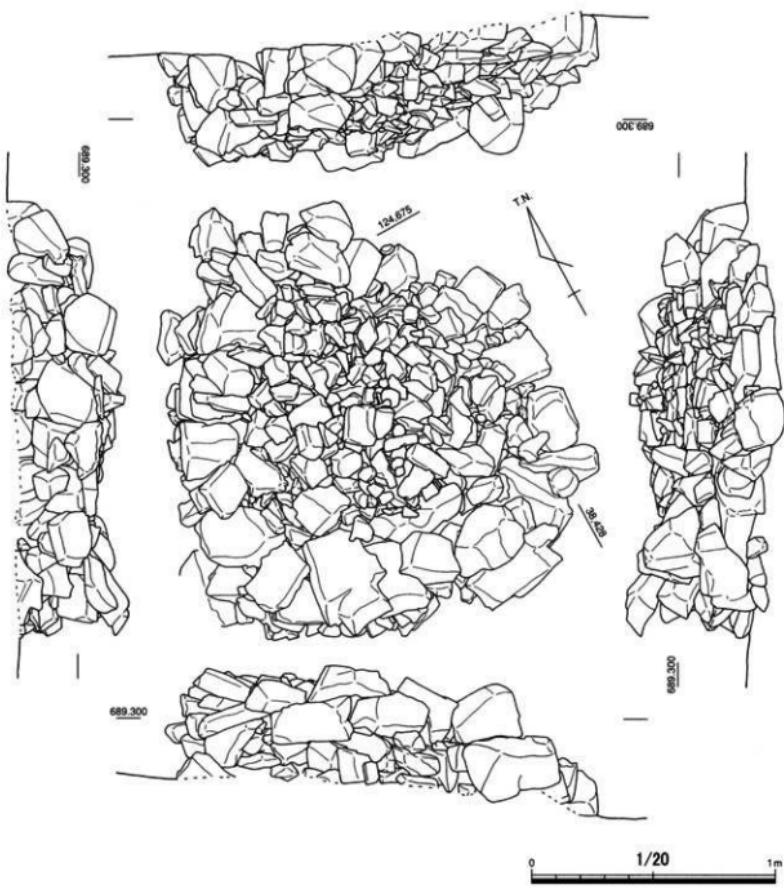
① 概要

石組遺構2についてはC地区に所在する石組遺構群の中で残存状況が良好であり、石組遺構の構造理解の上で特に重要な遺構であると考え、比較的徹底した発掘調査を実施した。

調査はまず検出状況を写真で記録した後、苔・落ち葉などを除去し写真・図面で現況の状況を記録した。その後転落した石を除去し本来の形状を残すと考えられる状況を写真・図面で記録した。その後内側の石を半分除去し断面図・基底面平面図の作成を行い、構造を確認した。最後に十字方向のトレンチを設定して下層の岩盤まで断ち割り、下部構造の確認を行った。

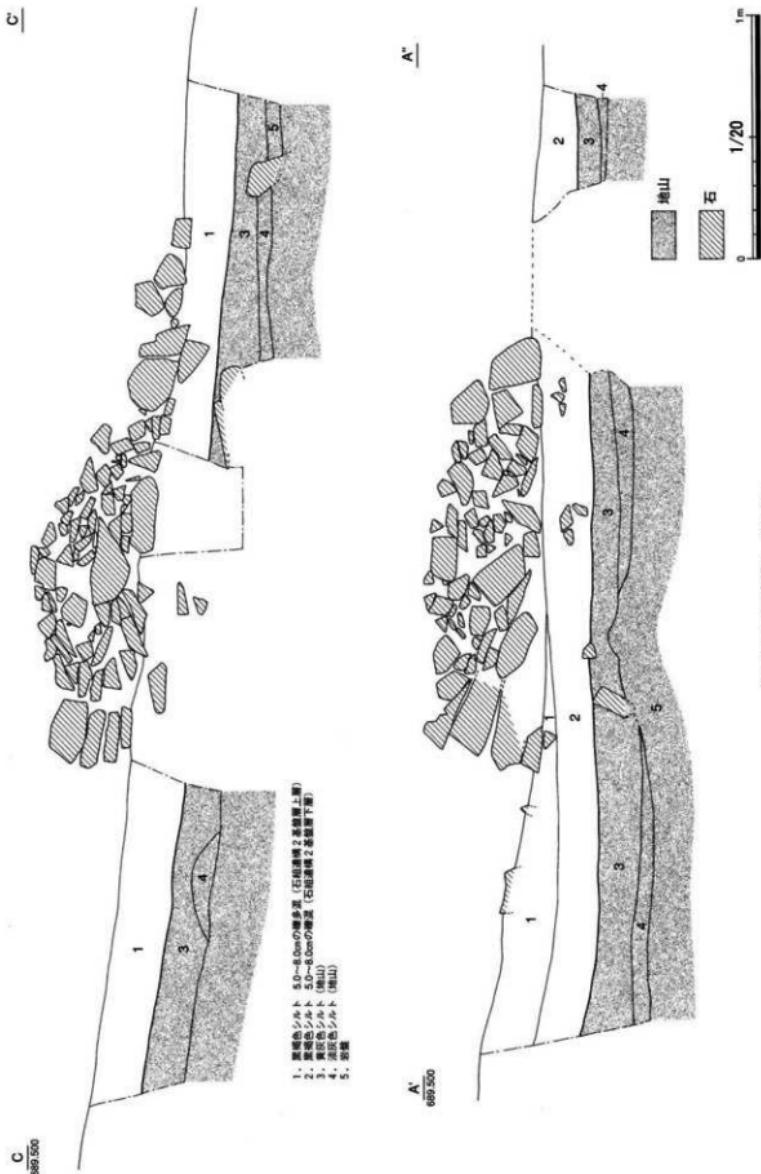
② 立地と現況（第3・6図、図版3・4）

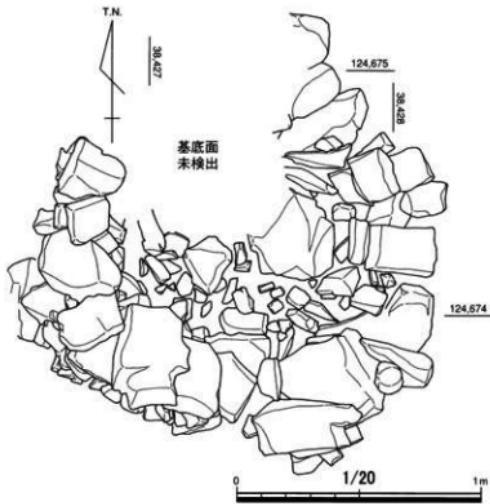
石組遺構2はC地区石組遺構群の中で石組遺構1・9・8と共に東方向に下る浅い谷の最奥部の標高約689m地点に所在する。石組遺構の周囲約1.0~0.5mは付近の緩斜に比べ傾斜が緩やか



第7図 石組遺構2 平・立面図

第8図 石組遺構2 断面図





第9図 石組遺構2 基底面平面図

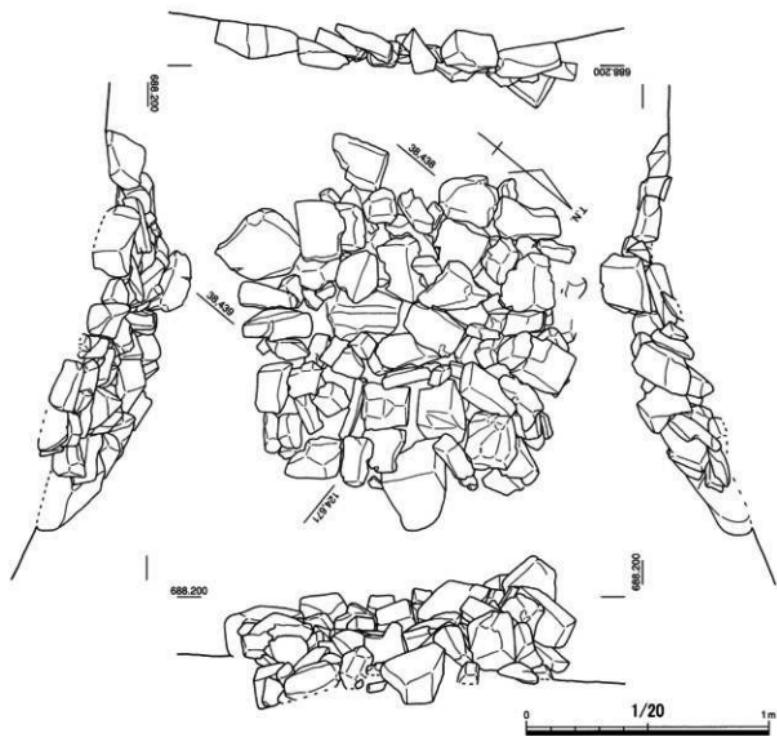
な平坦地形を成す。

検出状況の南北方向最長辺の長さは約2.7m、東西方向最長辺の長さは約2.1m、残存高は約0.5mであった。石組遺構の山側にあたる南西側は良好に残存するが、谷側にあたる北東側は石が崩落していた。また、南西側の側石は上位の石が石組内部へずれ込んでいた。石組遺構の上面は西～南半は人頭大の亜角礫で覆われ、東～北半は拳大の礫で覆われていた。

③ 石組遺構の構造（第7・8・9図、図版5・6）

落石除去後に確認した状況によると、平面形は基底石の南北幅約1.4m、東西幅約1.6mの若干側辺が膨らむ隅丸方形を呈する。石組遺構は四方向の側面に一辺約40～25cmの人頭大の亜角礫を小口積みして側壁を構築している。側壁側面をそろえるために調整を行った形跡は認められず、側面はやや凸凹のある面となる。人頭大の亜角礫で側壁を構築した後、その内側に一辺約10～5cmの拳大の礫を充填している。側壁はほぼ垂直に3～4段程度積み上げているが、面を形成して積み上げたなどの規則性は認められず、やや乱雑に積み上げていることが確認できる。

立面図・断面図によると、山側斜面にあたる東・南辺の側壁石材は上段の石が下段の石の内側にずれ込んでいることが確認できる。谷側斜面にあたる北東角付近の石は転落し、残存しない。東辺の側壁は基底石のみ残存するが、各石間に隙間が開いており、若干、原位置より動いているものと思われる。



第10図 石組遺構4 平・立面図

また、内側の石を除去後、基盤層上面で板石を多く用いて構築された基底面を確認した（第9図）。基底面のほぼ中央には一辺約40cmの大ぶりな板石が存在した。

④ 下部の構造（第8図、図版6）

石組遺構中央を十字方向に掘削したトレーナーによると、石組下部に土坑等の下部遺構は検出できなかった。基底石下部が③層の上位に位置するため、③層が石組構築の際の基盤層であると思われる。基盤層の傾斜角度については東西方向約8°、南北方向はほぼ平坦となる。

(4) 石組遺構 4

① 概要

石組遺構 4 については C 地区石組遺構群の中で残存状況が良好であり、石組遺構 3 と隣接していたことから、石組遺構の配置上の意味がある可能性を基に調査を実施した。

調査はまず検出状況を写真で記録した後、苔・落ち葉などを除去し写真・図面で現況の状況を記録した。その後転落した石を除去したところ、本来の形状を保つのは基底石のみであったため、基底石の状況を写真・図面で記録した。

② 立地と現況（第 3 図、図版 7）

石組遺構 4 は C 地区に所在する石組遺構群の中で石組遺構 3・7 と共に東方向に下る浅い谷の最奥部から若干下った標高約 688m の地点に所在する。石組遺構の山側と谷側には帯状の平坦地があり、石組遺構 4 はこの平坦地に挟まれた北東に下る緩斜面の上端に石組遺構 3 と隣接して位置する。

検出状況の南北方向最長辺の長さは約 1.8m、東西方向最長辺の長さは約 2.2m、残存高は 0.4 m であった。石組遺構は検出状況では平面形の推測が困難であった。

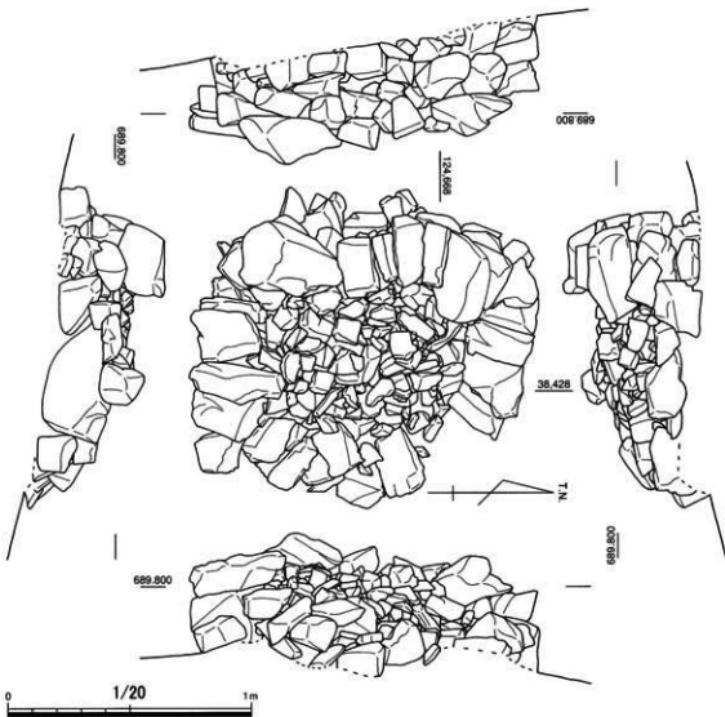
石組遺構の山側にあたる南西側は良好に残存するが、谷側にあたる北東側は石が崩落していた。

③ 石組遺構の構造（第 10 図、図版 8）

落石除去後に確認した状況によると、平面形は基底石の南北幅約 1.0m、東西幅約 1.2m の方形を呈する。側壁は基底石のみ残存している。四方向の側面に一辺約 40~25 cm の人頭大の亜角礫を積んでいるが、側壁側面をそろえるために調整を行った形跡は認められず、側面はやや凸凹のある面となる。内側の石は外側の石と同様な石材を用いるものの、若干板石も用いており、石組遺構 2 と同様基底面を構築していた可能性がある。

④ 下部の構造

石組遺構の下部を掘削していないため、確定はできないが、石組遺構の側壁基底石及び基底面の下位に堆積する埋土は下部を調査した石組遺構 2・9 と同様の埋土であり、石組遺構 4 の基底面はこの埋土と考えられる。



第11図 石組遺構9 平・立面図

(5) 石組遺構 9

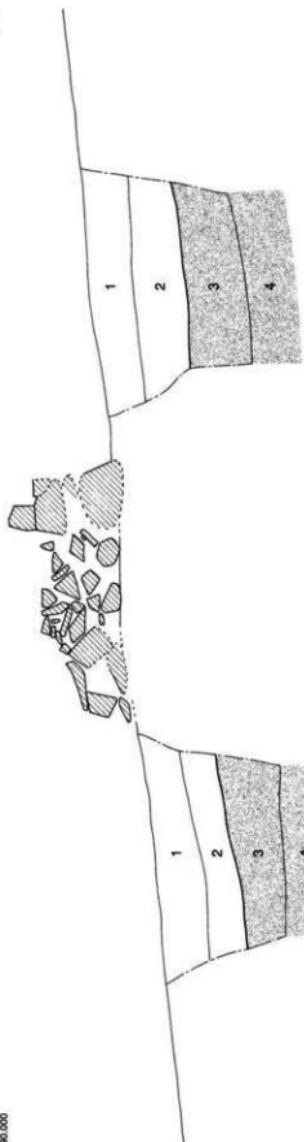
① 概要

石組遺構 9についてはC地区石組遺構群の中で残存状況が良好であり、石組遺構の構造理解の上で重要な遺構であると考え、発掘調査を実施した。

調査はまず検出状況を写真で記録した後、苔・落ち葉などを除去し写真・図面で現況の状況を記録した。その後転落した石を除去し本来の形状を残すと考えられる状況を写真・図面で記録した。その後半分の内側の石を除去しながら断面図を作成しつつ構造を確認し、最後に石組遺構外に基盤層確認のためのトレンチを設定し、下部の状況について確認した。

D

D
690,000



E
690,000



地山 石

1/20 1m

第12図 石組道構9 断面図

② 立地と現況（第3図、図版9）

石組遺構9はC地区石組遺構群の中で石組遺構1・2・8と共に東方向に下る浅い谷の最奥部の標高約689m地点に所在する。石組遺構は北東方向へ緩やかな傾斜で下る斜面上に位置する。

検出状況の南北方向最長辺の長さは約1.4m、東西方向最長辺の長さは約1.7m、残存高は約0.6mであった。

石組遺構の山側にあたる南西側は良好に残存するが、谷側にあたる北東側は谷側へ石が崩落していた。また、南西側の側石は上位の石が石組内部へずれ込んでいた。

石組遺構の上面は西～南半は人頭大の亜角礫で覆われ、東～北半は拳大の礫で覆われていた。

③ 石組遺構の構造（第11図、図版10・11）

落石除去後に確認した状況によると、平面形は基底石の南北幅約1.33m、東西幅約1.16mの若干側辺が膨らむ隅丸方形を呈する。石組遺構は四方向の側面に長辺約40～30cm、短辺15～10cmの長方形を呈する人頭大の亜角礫を小口積みしている。側面側壁をそろえるために調整を行った形跡は認められず、側面はやや凸凹のある面となる。人頭大の亜角礫で側壁を構築した後、その内側に一辺約5～10cmの拳大の礫を充填している。側壁はほぼ垂直に3～4段程度積み上げているが、面を形成して積み上げたなどの規則性は認められず、やや乱雑に積み上げていることが確認できる。

立面図・断面図によると、山側斜面にあたる東・南辺の側石石材は上段の石が下段の石の内側にずれ込んでいることが確認できる。谷側斜面にあたる北東角付近の石は転落し、残存しない。北辺の側石は基底石のみ残存する。

④ 下部の構造（第12図、図版11）

石組遺構外側に設定したトレンチで確認した①層は、内側の石組を除去した後に検出した表土と表面観察するかぎり同質であり、①層が基盤層であると考えられる。基盤層の傾斜角度については東西方向約5°、南北方向約8°となる。

（6）未調査の石組遺構

石組遺構1（図版12）

石組遺構1はC地区石組遺構群の中で石組遺構2・9・8と共に、東方向に下る浅い谷の最奥部の標高約689m地点に所在する。石組遺構は緩斜面と平坦地の境界付近に位置する。

検出状況の南北方向最長辺の長さは約1.7m、東西方向最長辺の長さは約1.6m、残存高は約0.3mであった。石組遺構は全体的に残りがよく、上面については、側壁は人頭大の亜角礫で覆われ中央部は拳大の礫で覆われていた。

現況から確認する限り、基底石の平面形は南北幅約1.2m、東西幅約1.4mの方形を呈する。構造は北東・北西・南西の角に一辺約45~35cmの人頭大の亜角礫を積み、角を除く4辺は一辺約20cmの石を積み上げる。側面をそろえるために調整を行った形跡は認められず、側面はやや凸凹のある面となる。側壁を構築した後、その内側に一辺約5~10cmの拳大の礫を充填している。側壁はほぼ垂直に2段程度積み上げているが、面を形成して積み上げたなどの規則性は認められず、やや乱雑に積み上げていることが確認できる。

石組遺構3（図版12）

石組遺構3はC地区石組遺構群の中で石組遺構4・7と共に、東方向に下る浅い谷の最奥部から若干下った標高約688mの地点に所在する。石組遺構の山側と谷側には帯状の平坦地があり、石組遺構3はこの平坦地に挟まれた北東に下る緩斜面の上端に石組遺構4と隣接して位置する。

検出状況の南北方向最長辺の長さは約1.4m、東西方向最長辺の長さは約2.4m、残存高は約0.4mであった。石組遺構は検出状況において平面形の推測が困難であった。石組遺構の山側にあたる南西側は良好に残存するが、谷側にあたる北東側は谷側へ石が崩落していた。上面は全体的に一辺約40~10cmの亜角礫で覆われており、側壁・基底石を確認することはできなかった。現況から確認する限り、面を形成して積み上げたなどの規則性は認められず、やや乱雑に積み上げていることが確認できる。

石組遺構5（図版12）

石組遺構5はC地区に所在する石組遺構群の中で石組遺構6と共に、東方向に下る浅い谷の最奥部から若干下った標高約687mの地点に所在する。石組遺構の山側と谷側に帯状の平坦地があり、石組遺構5はこの平坦地に挟まれた北東に下る緩斜面の上端に位置する。

検出状況の南北方向最長辺の長さは約1.0m、東西方向最長辺の長さは約1.2m、残存高は0.1mであった。石組遺構は全体的に一辺約10~40cmの亜角礫が表土上に散在した状態であり、基底石・平面形の確認が不可能であった。

石組遺構6（図版12）

石組遺構6はC地区石組遺構群の中で石組遺構5と共に、東方向に下る浅い谷の最奥部から若干下った標高約687mの地点に所在する。石組遺構の山側に帯状の平坦地があり、石組遺構6はこの平坦地から北東に下る緩斜面中に位置する。

検出状況の南北方向最長辺の長さは約1.3m、東西方向最長辺の長さは約1.2m、残存高は約0.1mであった。石組遺構は崩落が激しかったが、側壁の基底石が残存しており、かろうじて方形と確認できた。石組遺構の東角に一辺約35cmの石があり、他の側壁基底石は一辺約15~20cmの

亜角礫を積むが、北角の石及び中央部の石は転落しており、表土が露出していた。

現況から確認する限り、基底石の平面形は南北幅約 0.9m、東西幅不明の方形を呈する。

石組遺構 7 (図版 13)

石組遺構 7 は C 地区石組遺構群の中で石組遺構 3・4 と共に、東方向に下る浅い谷の最奥部から若干下った標高約 688m の地点に所在する。石組遺構の山側と谷側には緩斜面が続くが、石組遺構 7 はこの緩斜面中の狭い平坦地に位置する。

検出状況の南北方向最長辺の長さは約 1.2m、東西方向最長辺の長さは約 2.2m、残存高は約 0.2m であった。石組遺構は検出状況では平面形の推測が困難であった。石組遺構は全体的に一辺約 15~20 cm の亜角礫で覆われていたが、その隙間に一辺約 30~40 cm の亜角礫が認められ、それらが平面的に四角く並ぶことから基底石と考えられる。

現況から確認する限り、基底石の平面形は南北幅約 1.0m、東西幅約 1.0m の方形を呈する。

石組遺構 8 (図版 13)

石組遺構 8 は C 地区石組遺構群の中で石組遺構 1・2・9 と共に、東方向に下る浅い谷の最奥部、標高約 689m の地点に所在する。石組遺構の山側に平坦地があり、石組遺構 5 はこの平坦地に隣接する北東に下る緩斜面の上端に位置する。石組遺構の西側には崖みがあり、その付近にも亜角礫が散在している。

検出状況の南北方向最長辺の長さは約 1.8m、東西方向最長辺の長さは約 1.8m、残存高は約 0.4m であった。石組遺構は崩落が激しく、基底石・平面形の確認が困難であった。

北・東側の側壁の残りはよくほぼ垂直に 2 段程度積み上げているが、面を形成して積み上げた形跡などの規則性は認められず、やや乱雑に積み上げていることが確認できる。

石組遺構 10 (図版 13)

石組遺構 10 は C 地区石組遺構群の中で石組遺構 11・12・13 と共に、南側尾根鞍部から続く傾斜地の標高約 691m 地点に所在する。石組遺構は南側尾根鞍部から続く急傾斜地から若干傾斜が緩くなった地点に所在する

検出状況の南北方向最長辺の長さは約 0.9m、東西方向最長辺の長さは約 0.9m、残存高は約 0.1m であった。石組遺構は側壁上面については人頭大の亜角礫で覆われ中央部上面については拳大の礫で覆われていた。

現況から確認する限り、基底石の平面形は南北幅約 1.2m、東西幅約 1.4m の方形を呈する。基底石は北・西角に一辺約 30~25 cm の人頭大の亜角礫を積み、北辺は一辺約 40~35 cm の石を積み上げる。側面をそろえるために調整を行った形跡は認められず、側面はやや凸凹のある面となる。

側壁を構築した後、その内側に一辺約5～10cmの拳大の礫を充填している。側壁はほぼ垂直に2段程度積み上げているが、面を形成して積み上げたなどの規則性は認められず、やや乱雑に積み上げていることが確認できる。

石組遺構11（図版13）

石組遺構11はC地区石組遺構群の中で石組遺構10・12・13と共に、南側尾根鞍部から続く傾斜地の標高約692m地点に所在する。石組遺構は南側尾根鞍部から続く急傾斜地から若干傾斜が緩くなった地点に所在する。

検出状況の南北方向最長辺の長さは約1.4m、東西方向最長辺の長さは約1.9m、残存高は約0.1mであった。石組遺構は崩落が激しかったが、側壁の基底石がまばらに残存しており、かろうじて方形と確認できた。側壁基底石は一辺約30～20cmの亜角礫を積む。中央部の石は転落しており、表土が露出していた。

現況から確認する限り、基底石の平面形は南北幅約1.0m、東西幅は約1.0mの方形を呈する。

石組遺構12（図版14）

石組遺構12はC地区石組遺構群の中で石組遺構10・11・13と共に、南側尾根鞍部から続く傾斜地の標高約692m地点に所在する。石組遺構は南側尾根鞍部から続く急傾斜地に所在する。

検出状況の南北方向最長辺の長さは約2.7m、東西方向最長辺の長さは約2.7m、残存高は約0.1mであった。石組遺構は、全体的に一辺約15～50cmの亜角礫が表土上に散在した状態であり、基底石・平面形の確認が不可能であった。

石組遺構13（図版14）

石組遺構13はC地区石組遺構群の中で石組遺構10・11・12と共に、南側尾根鞍部から続く傾斜地の標高約694m地点に所在する。石組遺構は南側尾根鞍部から続く急傾斜地から若干傾斜が緩くなった地点に所在する。

検出状況の南北方向最長辺の長さは約1.0m、東西方向最長辺の長さは約1.4m、残存高は約0.3mであった。

現況から確認する限り、基底石の平面形は南北幅約1.0m、東西幅約1.0mの方形を呈する。側壁は北東角に一辺約35cmの人頭大の上面の平坦面を持つ人頭大の亜角礫があり、他の外辺部は一辺15～20cmの亜角礫を積み上げる。側面をそろえるために調整を行った形跡は認められず、側面はやや凹凸のある面となる。側壁を構築した後、その内側に一辺約10～15cmの拳大の礫を充填している。側壁はほぼ垂直に3段程度積み上げているが、面を形成して積み上げたなどの規則性は認められず、やや乱雑に積み上げていることが確認できる。

石組遺構 14 (図版 14)

石組遺構 14 は C 地区石組遺構群の中で南東方向に位置し、南側尾根鞍部から続く傾斜地 の標高約 689m 地点に所在する。石組遺構は南側尾根鞍部から続く急傾斜地から若干傾斜が緩くなった地点に所在する。

検出状況の南北方向最長辺の長さは約 1.4m、東西方向最長辺の長さは約 2.2m、残存高は約 0.1m であった。石組遺構の北・西辺は露出しており、北西角はほぼ直角となる。

現況から確認する限り、基底石の平面形は南北幅不明、東西幅約 0.9m の方形を呈する。側壁は北東角に一辺約 35 cm の人頭大の上面の平坦面を持つ人頭大の亜角礫があり、西辺は一辺約 40~15 cm の石、北辺は一辺約 30~25 cm の基底石のみ残存する。側面をそろえるために調整を行った形跡は認められず、側面はやや凸凹のある面となる。側壁を構築した後、その内側に一辺約 15~10 cm の拳大の礫を充填している。

石組遺構 15 (図版 14)

石組遺構 15 は C 地区石組遺構群の中で南東端に位置し、急斜面との境界付近の緩斜面標高約 687m 地点に所在する。石組遺構は南側尾根鞍部から続く急傾斜地から若干傾斜が緩くなった地点に所在する。

検出状況の南北方向最長辺の長さは約 0.8m、東西方向最長辺の長さは約 0.8m、残存高は約 0.1m であった。石組遺構の北・西辺は露出しており、北西角はほぼ直角となる。

現況から確認する限り、石組遺構の北辺は約 25~30 cm、他の 3 辺は約 10~15 cm の基底石のみ残存する。側面をそろえるために調整を行った形跡は認められず、側面はやや凸凹のある面となる。側壁を構築した後、その内側に一辺約 10~15 cm の拳大の礫を充填している。

石組遺構 16 (図版 15)

石組遺構 16 は C 地区石組遺構群の中で東端に位置し、急斜面の標高約 681m 地点に所在する。石組遺構は南側尾根鞍部から続く急傾斜地から若干傾斜が緩くなった地点に所在する。

検出状況の南北方向最長辺の長さは約 0.8m、東西方向最長辺の長さは約 0.8m、残存高は約 0.1m であった。石組遺構の北・西辺は露出しており、北西角はほぼ直角となる。

現況から確認する限り、石組遺構の北辺は約 25~30 cm、他の 3 辺は約 10~15 cm の基底石のみ残存する。側面をそろえるために調整を行った形跡は認められず、側面はやや凸凹のある面となる。側壁を構築した後、その内側に一辺約 10~15 cm の拳大の礫を充填している。